

立命電友会

山本茂先生を偲んで



山本茂先生は、今年三月二日九四歳の生涯を全うされ卒然として逝されました。

先生は昭和十四年（一九三九年）前身の立命館日満高等工科学校が衣笠の地に開設されるのを機に、初代校長の本野亨先生（京都大学名誉教授）に請われて赴任され、途中、昭和十八年より一時鐘淵通信工業（株）に勤務されましたが、昭和二十年終戦とともに、立命館大学に附設されていた立命館大学専門学部工学科教授に復職、以来、昭和五十一年（一九七六年）に定年を迎えられるまで三十五年の長き

にわたり電気回路論、過渡現象論などの講義を担当され、教育指導に全力を傾注されました。

日頃は温厚な先生も、成績評価は非常に厳格で、毎年、相当数の不合格者を出していたことから、「鬼の山本」、「情けの△△」といった風評も伝わっていましたが、「回路論は電気工学の基礎として、しっかりと理解して欲しい」との思いから、実際は、非常に思いやりもあり、この科目が不合格で留年する人も少なかったように思います。また、補導委員（現、学生委員）を永く務められ、学生諸君の相談にも気さくに応じられ、面倒を見ておられました。先生との話の合間に、学業半ばで学徒出陣した卒業生の消息を思いやりながら、自身の戦争体験談も交えて戦争中の話を良く聞かされた物です。

昭和三〇年ころ、角形ヒステリシス特性を持つ優れた磁性材料が開発されて、磁気増幅器や磁気変調器、磁気発振器、周波数変換器、

直流変流器、検出器など、磁気応用機器の研究開発が盛んに行われるようになり、戦後のオートメーション化の中で、磁気増幅器と電磁スイッチは自動制御装置の主要構成部分として工業のあらゆる分野で使用されました。

先生は、それまで京都大学名誉教授・林重憲先生に師事され、サージ計算盤の設計や回路の過渡現象解析への取組みの傍ら、電磁機器の磁気回路解析について思索を続けておられました。丁度、本学でも三亀幸雄先生、前田稔夫先生のコンビで可飽和リアクトルや磁気増幅器について、小原誠先生はT社と組んで電磁スイッチの駆動部について、それぞれ特性解析に取り組みられるようになって、先生も本格的な取組みを始められ、私がお手伝いをするようになって以後、今日まで多大のご指導を頂きました。

交流電磁石は振動による騒音を軽減するために駆動部は鉄心磁路の一部を囲む1ターンの短絡コイル（これをくま取コイルと呼ぶ）を付したものが構造が簡単なことから良く使用され、同様のものは扇風機などに使われていた单相誘導電動機の始動用などにも利用されてきました。電磁気的には、一種の磁気漏れ変圧器と見なすことができることから、磁気漏れ変圧器の磁気回路解析を行い、この結果をくま取り電磁石や鉄共振変圧

器の解析、放電灯点灯回路への応用に展開し、これらの動作解析を行うと共に、各種の改良型を提案し、設計法を明らかにされています。

その成果をこの分野の内外の研究結果をレビューしたまとめと共に本学理工学研究所紀要第一七号（昭四三）などに発表されましたが、先生は企業人としての経験から大学での研究であっても研究開発の成果は、まず特許取得が先決との信念から学会発表より特許取得に傾注され、論文として発表する時期を逸し、世に問うことがなかったことが残念に思われます。しかし、当時は特許に対する大学の評価は芳しいものではありませんでした。今にして思うと、研究業績の評価にも隔世の感があります。研究成果を纏めた先生の数百ページにもなる自筆資料のコピー（青焼きのもの）は今でも手元にあります。

鉄共振回路の解析では、電圧電流波形は歪波になることから、これを調波分析するのですが、今日のようにFFT解析装置があるわけではなく、波形は電磁オシロや3インチほどのブラウン管オシロに映し出した波形を、二五ミリフィルムに撮り、写真に拡大現像し、これを方眼紙にトレースして五〇点から一〇〇点近くに分割してその振幅を読み取り、その数値処理はタイガー計算機と丸善発行の数

表によって行う、と言った処理を数百点にものぼる波形について行う作業を延々と続けました。後に発売されたリレー式の計算機を、国からの助成金で当時では大金の百万円で購入してもらい、少しは楽になりましたが、先生共々、悪戦苦闘したことなど、今ではその苦勞も忘れ、懐かしく思い出されます。

誘導電動機の回転磁界は空間と時間の関数となる一種の進行波になります。その表現法について問題提起され、ライフワークの一つとして亡くなるまで思索を続けて居られました。この件で年に二、三回呼び出しを受け、時には、3〜4時間にも及ぶ議論をしたこともあり、先生の手元には、原稿の素案も出来上がっていました。先生が、先生の意を汲み取ることができず、意見の相違もあって、公にし得ませんでした。

晩年、老人福祉施設でデーサービスをうけて居られましたが、その折にも電気回路論や誘導機（電気学会・大学講座）の本をいつも肌身離さず持参されていたの話を、ご家族の方から伺いましたが、先生の無念の気持ちを感じ、誠に申し訳なく思っています。思い出は尽きませんが、先生のご厚恩に感謝するとともに、在りし日のお姿を偲び、心からご冥福をお祈りしつつ筆を擱きます。

浦山 隆

新任のご挨拶

中から垣間見た、 躍進する立命館

電気電子工学科
沼居 貴陽

民間企業二社（NEC、キャノン）と国立大学一校（北海道大学、助教授）を経て、この四月、立命館大学に着任しました。出身は、いま大学改革が成功している「東の慶應、西の立命館」の一つ、慶應義塾です。立命館大学理工学部

(1) 教室で

前回の講義中に寝た学生が、講義前から教壇付近をウロウロ。「どうしたの？」と声をかけると、「宿題を早く提出したかったんです」という返事。ノートを返してもらうと、思いっきり予習してある。予習してくる学生がいるなんて……

(2) 実験室で

前回休んだ学生が、頭を丸めている。「暑くなってきたから？」と聞くと、「寝坊して休んだ自分に腹が立って。一生懸命、実験に取り組んでいるんです」

(3) 図書館で

十人くらいの学生に取り囲ま

れ、一瞬身構える。すると、二コツとして「先生、ちょうどいいところへ。質問が……」他の学生の邪魔にならないところへ場所を移して、即席授業の開始。個人研究室で

(4) 個人研究室で

(a) 講義を聞いている学生が、「先生、質問が……」
(b) ホームページを見た理工学部の学生が、「先生の研究室に行きたいんですけど……」
(配属には、まだ早い)
(c) ホームページを見た経営学部の学生が、「ビジネスの現場について、相談が……」

(5) 日本の大学とは思えないくらい美しいキャンパスで

実験を担当しているクラスの学生が、ニコツツとして、「先生、こんにちは」
以上が、躍進している立命館の一コマです。やる気のある学生の輪（和）をさらに広げたいと思っています。

波に揉まれて

電子光情報工学科
齊藤 茂

ある日の午後、桜島を正面に望む埠頭を離れ、船は穏やかな錦江湾を進んだ。これから向かうのは奄美大島の近くである。

その夜、あまりよく眠れないままに、船室のベッドに横たわって

いると、次第に船の揺れが大きくなってきた。それと同時に気持ちの悪さもつより、気を紛らわそうとすればするほど、深みにはまっていくな。明け方にはとうとう耐えられなくなり、何度も、何度も洗面室に駆け込んだ。鏡に写った顔を見ると、すでに血の気はなく、げっそりとしていた。

昨晚の歓迎会での元気の良さはどこへいったのか、一日もたたないうちに、乗船したと飲みすぎたことに対する後悔の念が頭をよぎった。朝食の時間になっても起きだして食堂に行く気になどともなれたものではなかった。

船の名前は「黒潮丸」、海底ケーブルの敷設線である。十年近く前、我々が開発したシステムを鹿児島沖縄間に敷設することになり、何人かの研究者が試験のため同乗したときのことである。このときの敷設は鹿児島側の半分で、まずは敷設ルート上の試走から始まった。幸いにして、二、三日もするとあの船酔いもケロッと直ってしまった。

その後はすこぶる快適で、いろいろな意味で研究所とは違うスケールでの仕事を楽しむことができた。

この光ケーブルは、光増幅器を中継器として用いたシステムである。

私自身、研究所では、光増幅器の雑音指数はどれほどか、システム全体の信号対雑音比はどうか、どのか、どれくらい遠くまで信号を送れるのか、などという研究をしていた。

今、立命館大学にお世話になるにあたって、このような経験が学生の皆さんに少しでも役立てばと思っている。ここでは、ちょっとした体験を紹介することで、自己紹介とご挨拶にかえさせていただきます。

夢を見る力をのびしたい

電気電子工学科
福井 正博

九十年代初頭、国際競争力一位であったものが、二〇〇二年には三十位に落ち込んでいるという。バブルが弾けて、経済活力や事業環境が低下したのが影響している

とはいえ、この停滞ぶりに対しては、産業人、教育人、ともにお互いに反省すべきところがあります。

九十年代初頭の日本は、垂直統合形企業の大盛期で、それぞれが洗練された製造技術に基づく高品質で、半導体メモリや自動車、家電などにおいて、ほぼ一人勝ちの状態を呈していました。

その後の十年は、半導体設計のキーとなるEDA技術、汎用LSIの製造などが、費用、技術の両面において高効率な水平分業化に進みました

が、EDAは米国主導、汎用LSI製造は台湾主導で進んだため、日本全体で見れば、水平分業化と同時に富とノウハウが外部流出する形になりました。しかも、日本の垂直統合企業は、設計技術や製造技術の高位平準化による過当競

争を招き苦戦している現状です。しかし、悲観することなかれであり、日本は、もともと、情報家電等のシステム力において、優位性を持っており、映像や音声を扱う分野においてのノウハウの蓄積は海外から見れば依然垂

睡のものです。これらは、松下幸之助、井深大、のような人たちははじめ多くの人が、世の幸せを願って努力を重ねてきたところにより、大きく夢を見、周りと協調して努力を重ねてきたところにより

ます。日本人のまじめさ、素直さ、粘り強さは遺伝子に仕組まれた貴重な財産であり、もともと、夢を見る力とそれを実現する力は強いのです。今後の十年は、システム

LSIに関するグローバル競争が激化し、超低電力化、超低コスト化、超高性能化等、LSI実現技術の飛躍的な革新が求められます

また、ユビキタス情報社会に向け、用途も多様化する時代を迎えます。このような中、産官学連携が強化されるなど、日本の中でも産業構造が良い方向に変化しつつあります

す。いままでは、窮屈な産業構造で元気を無くしていた日本の遺伝子に活力を与えるチャンス到来です

このたび、立命館大学という非常に活力のある大学で研究教育活動ができる機会を与えていただいたことに感謝するとともに、これからの「ジャパンカムバック」の時代に向けて、大きく夢を見、学生と一緒にそれを実現する力をのびしていきたいと思います。

ばしていきたいと思います。

電気電子工学科
藤野 毅

今年四月まで、大手電機メーカーのLSI部門で電子ビームリソグラフィを中心とするLSIプロセス技術を約九年間、混載ダイナミックメモリを中心とするLSI設計技術を約七年間開発してきました。この間に、ビジネス環境は、DRAMなどの規格部品の大量生産から、個別の電子機器向けのシステムLSIへと大きく変革しました。技術的にも、LSIの微細化により高集積・低コスト・低消費電力が全て実現できた時代から、

微細加工コストの高騰とトランジスタの待機時電流増大により、微細化が必ずしも低コスト・低消費電力を実現できない時代へと変わってきました。

一方、携帯電話やデジタルカメラに代表されるように電子機器の軽薄短小のニーズは根強くあり、多くの機能を持つ電子機器を少ないLSIで実現するため、システム・回路・デバイスに精通し最適な電子機器システムを構成できるエンジニアが、今後も数多く必要です。これを実現することにより、二十世紀後半に日本の代表的産業であった電子機器業界を、二十一世紀も世界的に競争力ある産業として生き残らせることができると思います。

来年度に予定されている電子情報デザイン学科ではこのような学

生を養成し、LSI業界のみならず、広く日本の電子機器業界に送り出していく責任があります。私も新学科の一員として、「機能メモリを混載したシステムLSIの研究」を通して、学生を養成していきたいと考えています。実践的なLSIの設計テクニックも重要ですが、システムLSIにおいては「何をLSI化するか」ということが大切であり、学生には、ネットワーク装置などの電子機器を使用することを通じて、機器中のLSIの役割を理解できる能力を身につけてほしいと思います。

私自身も、立命館大学の他の学科の先生方とも交流させていただき、私が経験してこなかった、ロボット・環境・生命などの分野の基礎的な知識を学び、新しい分野へLSI技術を応用するチャレンジをしたいと考えています。

電子光情報工学科

藤枝 一郎

まず簡単に自己紹介させていただきます。私は、八一年に早大理工物理学科を卒業し、島津製作所勤務を経て、U. C. Berkeley博士課程を九〇年に修了しました。主専攻は原子核工学で、副専攻は半導体デバイスと医用画像工学でした。その後の約二年間は、Xerox PARCのポスドクとしてP&SIイメージセンサの研究に携わりました。九二年からの約十年

間は、NEC中央研究所でイメージセンサ、指紋センサ、薄膜トランジスタ、ディスプレイ、等を研究し、本年4月に本学へ着任しました。

最近、生体識別機能を備えた指紋センサ、AWDと命名した薄型ディスプレイ、液晶回析素子の光通信や光実装への応用を中心に検討しています。特に、指紋センサは情報社会のセキュリティを確保して電子商取引や電子政府等の新規サービスの普及を促進し、我々の日々の生活や産業界に大きな波及効果をもたらすと期待しています。更に、いずれも発案段階ですが、干渉光による液晶回析素子の形成、光照射による結晶の成長、ドーピング、材料転写、等のデバイス形成のための光応用にも興味を持っています。

「百聞は一見にしかず」とことわざにあるように、画像情報の有用性は改めて強調するまでもありません。ディスプレイやイメージセンサ等の画像情報を扱う機器はコンピュータのためのヒューマン・インターフェイスという側面もあり、情報社会の進展と共にその重要性は一段と高まっています。私はこのような画像情報機器にスポットを当て、最先端の応用デバイスやそのための要素技術を研究すること、および、それに必要な人材を育成して世の中に送り出すことにより、今後の情報社会の発展に寄与していきたいと思っています。

電子光情報工学科
笠原 健一

この四月より電子光情報工学科に赴任するご縁に恵まれました。それまではNECで光情報通信関連の研究開発に携わっていました。が、こちらに来る一年半の間は米国のプリンストンにある子会社におりました。米国は光通信バブルがはじけてグローバルコム等の大手企業が破産、日本国内の景気は最悪と厳しい状況の中で一年半で悪化した。会社は近くのプリンストン大学とは車で十分ほどの距離。この高名な先生とは研究契約を結んでいましたが会社のオフィスの方が居心地が良かったのか殆ど毎日、会社で顔をあわせていました。学生はインターンシップ等で常時

きていたので最初は社員と区別がつかなく困ったものでした。大学とはまた契約を結び、そのプロセスルームを使わせてもらっていました。ある日そのセンター長たる先生が会社に来てくれましたが、目的はプロセスルーム維持のために是非、継続して使って欲しいという宣伝。昔、出た日本の大学のイメージしかなかったために米国の大学は違うなあと思った次第です。

さてこちらに来て改めて日本の大学も変わってきていると感じたし、本学は中でも時代の先頭を走っているものと認識しました。これからは良い意味での大学のプ

ランド力がますます問われる時代になるものと思っています。それには社会にとって魅力的な学生を輩出していく教育が必要でありますし、研究面でも産業界のシーズとなるような実績を残していかなければなりません。限られたリソースの中でこれを両立させることは容易な作業ではありません。が、それがゆるぎないブランドの確立にもなるわけであって、学部、学系の諸先生方、事務局の皆様にもお力添えを頂きましてその方向に幾分なりとも寄与できればと思っております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

電気電子工学科

川畑 良尚

このたび四月より、大阪府立工業高等専門学校から、本校電気電子工学科助教として赴任しました。

私は、本校の卒業生であり、四年前まで本校で助手として働いていましたので、久しぶりに母校で仕事することとなります。一九九〇年に電気工学科(衣笠キャンパス)に入学し、卒業研究では、辻村・前田研究室でお世話になり、主に電動機制御の研究を行いました。大学院では、新しく創設されたBKCキャンパスで、新しい研究室に移籍しました。川畑隆夫教授(現特任教授)のご指導の元、研究室のメンバーとともに実験装

置を作成したこと、海外へ学会発表を行ったこと、学位を取得するまでに三月ほど連日睡眠時間が少なかったことなど、懐かしく思い出されます。これまでに、高性能、高効率で低騒音のシステム作りを目指し、二台のインバータを用いた新しい電動機駆動システム、LCフィルタ付きインバータによるベクトル制御システムなどを提案してきました。

現在は旧川畑研究室（パワーエレクトロニクス研究室）を引き継ぎ（同じ研究室名が続くことは不思議な感じがしますが）、上記の研究を進展させるとともに、太陽電池や燃料電池など新エネルギーシステムをはじめ、環境問題に役立つ「クリーンパワーエレクトロニクス」や、新しいデバイス、主回路制御方式を利用した「インテリジェントパワーエレクトロニクス」に力を注いでいます。特に、電車、電気自動車、家電製品などに使われるインバータや、新しい形式の電動機、発電機などに関する研究も行いたいと考えています。また、高専における教育経験を生かし、教育に関する研究も行いたいと考えています。趣味は音楽鑑賞、パソコンです。音響工学研究会の顧問もしています。

今後ともよろしく願っています。

電子光情報工学科

田口 耕造

本年四月に電子光情報工学科に着任いたしました田口耕造と申します。立命電友会会員の皆様、どうぞ宜しくお願いいたします。私は昭和四十三年に京都市で生まれ、

高校時代までは和歌山県橋本市で過ごし、昭和六十二年に理工学部電気工学科に入學してから平成八年までの九年間、立命館大学で学生生活を送りました。七年間は衣笠キャンパスで、残り二年間はびわこ・くさつキャンパス（BK）で過ごしました。卒業・修士研究では電気工学科の中西恒彦教授の研究室におきまして、画像処理型車両検知システムの研究を行いました。博士後期課程では溝尻勲教授のご指導のもとで画像計測、動画像処理、信号処理に関して三年間研究活動を行いました。その後、本年三月までの七年間、福山大学工学部電子電気工学科で助手・講師として勤務しておりました。このとき、立命館時代のTA、RA、一号助手などの多くの経験が非常に役立ちました。福山大学着任後は研究テーマを光エレクトロニクス分野へと大きく変更し、光ファイバトラッキング、半導体リングレーザジャイロスコープ、光機能デバイス等に関して学生のみならずと研究活動を行いました。立命館大学に着任以来約半年が過ぎ、現在二名の学生と共に研究室を手

探りて構築中でありました。これまでに経験した研究内容を継続し、学生（後輩）と共に新しい研究分野を開拓して行きたいと考えております。今後とも宜しくお願いいたします。

電子光情報工学科

荒木 努

二〇〇二年四月より、任期制講師として電子光情報工学科に着任いたしました。実のところ、講師として着任をする以前から既に立命館大学にはお世話になっておりました。一九九七年に大阪府立大学大学院博士後期課程金属工学専攻を修了後、ポスドクとして米国にて研究活動を行っておりました。その後一九九八年四月から立命館大学理工学部電気電子・光系の二号助手を二年間務めた後、ZEDO地域コンソーシアムプロジェクトのポスドクとして、再び二年間本学にお世話になりました。従って、あわせまして今年二〇〇三年度が立命館大学で過ごす六年目となりました。そうした中でこの度新任の挨拶をさせていただくことには多少恐縮する面もあるのですが、講師として着任して一年以上が経ち、やはりこれまでの立場とは大きく違った責任感を日々感じている次第です。特にこれまでは主に研究活動中心の形でありましたが、講師として昨年度より学部教育、大学院教育、学系の運

営に微力ながらも携わらせていただくようになり、忙しいながらも充実した日々を送っております。特に私が本学に来てから、毎年のように新しい建物が建設され、本学の教育、研究施設の発展を目の当たりにしてきました。今まさに立命館大学は、大型国家プロジェクトや二十一世紀COEの採択に見られるように、日本の教育・研究の重要拠点として全国レベルで認知されるようになったことは疑いのないことであり、本学で教育・研究に携われるやりがい、幸せを感じております。今後ますますの精進を決意いたしますとともに、学系、電友会のみならずの発展を祈念いたします。新任の挨拶とさせていただきます。今後ともご指導、ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

電子光情報工学科

佐々木 誠

四月より電子光情報工学科の講師として着任いたしました佐々木と申します。今後ともよろしくお願いたします。

私は大阪大学理学部物理学科において博士号を取得し、その後千葉の放射線医学総合研究所（放医研）にてポスドクとして二年半を過ごし、今日に至りました。放医研では私は放射光を用いた新しいCT装置の研究・開発をしており、その関係から本大学の山田廣成先

生のポータブル放射光発生装置「みらくる」の研究・開発に携わることとなりました。

着任前に私が研究活動をしてきた放医研という所は、重粒子線（主に炭素線）を用いたがん治療施設であり、また世界で初めての医療専用のシンクロトロン加速器施設でもあります。この放医研では物理学だけでなく、医学・化学・生物学などさまざまな分野の研究者および建設・医療関係等の産業界が集約して活動しています。私は大学では原子核研究のグループに属しており、自分の研究活動の学問的意義は理解できても社会的意義についてはあまり考えることはありませんでした。しかし放医研での研究活動はまさに学問的意義同様に社会的貢献ということにも深く考えさせられるものでした。ここでの経験は私にとって貴重な財産であると考えております。まだ着任して間もないのですが、医療機器関連の研究・開発に興味を持って多くの学生が多いことを知りました。そうした学生たちに少しでも世界でトップクラスの日本の医療技術の現状を知ってもらい、また教えるための情報を積極的に収集・広報し、将来社会的責任を負うようになった彼等がたくましい活躍を見せてくれるように本校の教育現場では心掛けたいと考えています。

電子光情報工学科
文 雅司

立命館大学に赴任しまして、約四ヶ月がたちました。新任の挨拶といいますが、本来ならば、初めての講義の感想などを書くのですが、幸か不幸か、私の講義は後期のもので、まだ教壇に立っておりません。また、過去教壇に立った経験がなく、この立命館大学での講義がはじめての経験となるわけですね。というわけで、講義の進め方に関して、現在のところは、いろいろ頭の中で思い描いている状態です。自分が学生時代に受けていた講義でも、理解しやすいものもあれば、ほとんど理解できないもの、興味の引くものや、眠たくなるものと色々でした。そのようなことを思うと、より多くの学生に、分かりやすく、興味を引き、実用的で、なによりも楽しい講義にしたいと思えます。そう言うわけで、今ほどのような進め方で講義をすればいいのかと頭を悩ませています。とはいっても、大体の方針は決めていて、あとは、本番を待つばかりです。この挨拶文が読まれるのは十月以降らしいので、そのころには、何回か講義が終わっているはずで、うまく講義ができていることを願っています。これを読んだ学生に、話が違うぞと言われぬようにがんばっていきたいと思います。それから、私生活？に関してなどは、これを書いた時点ではまだ予定ですが、

八月二十日に結婚（とりあえず入籍）します。相手は私と同じ在日韓国人ですが、約七年間付き合っていたからの結婚です。といっても私生活でも大きな変化がくるかもありません。これからの立命館大学での生活で、公私共に充実しているようがんばりたいと思います。

● 同窓会だより ●

紫山会（昭和四十三年卒）

六月二十一日（土）京都市平安神宮近くの岡崎の静閑な町並みにある料亭「味ま野」で一年ぶりに紫山会（昭和四十三年電気工学科卒同窓会）が開催された。

浦山先生と前田先生を囲んで、同窓生十三名が集い懐かしく思い出を語りあった。

お二人の先生から最新の母校が発展拡大している状況や現在の学生気質等の興味深いお話を戴いた。また、私たち同窓生は遠路松江や高松、三重県桑名市から駆けつけてくれた旧友を交えて、卒業後の人生遍歴、家族や現在の目標、苦労話などに花を咲かせた。卒業後三十五年の年月を重ね、お二人の先生は現在も非常勤で大学教育に情熱を注いでおられることをお聞きして大変敬服致しました。私たち同窓生は、六十歳定年前後になり、大きな節目を迎え新しい人生航路を開拓しようと精進していることを誓い合った。会が盛り上がり、終わりに全員で記念写真を撮り、終わりに全員で記念写真を撮

り閉会した。この後、全員が近くの喫茶店で語り、再会を誓い解散した。晴天に恵まれ、有意義で思い出深い初夏の日を過ごした。



立電三〇会（昭和三十年卒）

古希を過ぎ晴耕雨読で日々を過ごしている私たち、昨年の電友会創立十周年祝賀会場で再会した学友の話題で次回の同窓会は、学友の横溝氏宅（倉敷市児島味野の「よし友旅館」）で瀬戸内海を眺めて語り合おうと、別れたが参加希望を募ったところ多数になったので急遽場所を淡路島南淡町の民宿に変更して五月三十日から一泊旅行で集いました。

当日はあいにくと台風四号の襲来で、危ぶまれましたが十四名が集まり行くことに決定、道中はまだ天候も晴れて景色を眺めながら現地に到着する。夜外は風雨で荒れだしましたが、内は季節の旬、

ハモの料理一式に酒も加わり話題も昔話に花が咲きました。夜も更けて次回の予定はとなり永楽氏の提案で〇四年秋に関西汽船を利用して大分県のAPUを訪問夜は湯布院で一泊、〇五年は石田氏の発案で（十月十七日）新居浜のお祭りを見に行くことになりました。その時期になれば詳細を添えて皆様にご案内致します。

翌日は台風情報とニラメッコで鳴門の渦を見ることもなく、明石大橋が渡れなくなると困るので次回の再会を約束し予定を早めて帰宅の途につく。

余談台風の進路が西にずれたので神戸・大阪・京都は晴天の状態でした。

参加者

- 石田本清・永楽藤八・岡本一郎
川村徳太郎・窪田 博・柴田 勇
柴田卓男・内木清司・中山善隆
藤岡孝造・前田稔夫・屋敷幸男
山根雷三・横溝 幸

以上十四名



二九電友会

平尾 良一

風薫る五月半ば、ことしも同窓会例会を四条河原町の料亭で開催致しました。本年三月は衣笠山麓の等持院学舎に別れを告げて五十年「光陰矢の如し」とは、まさにこのことかと云う実感と感慨深いものがあります。

出席者は十一名で、やや寂しい顔ぶれとなりましたが、これは昨年十月に盛況裡に開催された電友会十周年記念祝賀会から半年後ということでは止むを得ないことと思っております。

会は、柴田事務局長の手による名簿など詳細な資料の確認と物故者の話題で始まり、主題は来年度卒業半世紀祝賀セレモニーの取組みに関する意見交換に移り、議論百出の末、一泊旅行案が浮上、とりあえずの結論としては、今秋に幹事会を校友大会開催時を利用して開き実行計画を検討することによって一致した。

会の楽しみは、やはり宴会、未だ酒豪を名乗る者、ノンアルコールビールで満足というグループが入り交り和気藹々の三時間を十分堪能して次回の再会を約して散会した。

すでに古稀を過ぎ高齢化社会の真只中にある同窓諸兄の皆様、来年は大きな節目を迎えます。

「友と葡萄酒は古きほど良し」と申します。お互い健康に留意のうえ元気な姿で喜び、語り合う機会を提供できるよう案内を差し上げますので乞うご期待。

辻村・前田研究室、 浦山研究室合同同窓会

一九八〇年卒 小川 弘之

去る初夏の候六月七日、東山七条東山閣にて、六十三名の両研究室同窓会員の参加による合同同窓会が開催されました。辻村先生、前田先生、浦山先生を中心に数名の準備委員を加え、一年に亘る綿密な意見調整会と称する小宴会を開き、万全の事前準備を経て本同窓会開催の運びとなりました。私も岡田氏、加藤氏と共に準備委員として微力ながら川畑幹事に協力させていただきました。本同窓会のそもそもの発案は、本学電友会の各同窓会活動への積極的な支援もさることながら、三名の先生方の「研究室同窓会を今後も益々盛り上げていこう」とされる強いご熱意と、お酒をこよなく愛する呑み助であられたことに端を発しています。過去にこういった事例があったのかどうかは存じませんが、今般の政財界での再編劇のトレンドをいち早く取り込み、将来への発展の基礎を作るためのこのたびの迅速かつ緻密な行動は、正に激動の社会、ビジネス環境に呼応する動きを髣髴させるものと言えます。

開宴にあたり、まず辻村先生のあるのユーモアを交えた含蓄のあるご挨拶に始まり、機密会議を抜け出し駆けつけていただいた浦山先生のご挨拶に続き、豪華版割りのあと、前田先生によるお人柄が滲み出た少々長めの乾杯のご発声、辻村・前田研の藤井会長によるこ



帳面な会計報告、浦山研の巻田幹事長によるこれまたお人柄がしのばれる詳細資料を必要としない直観的な報告のあと、恩師、諸先輩方等々入り乱れての大懇親会二時間一本勝負へと幕進いたしました。紙面の都合上詳細についてご紹介できないのは残念ですが、「両同窓会の組織自体を統合させてはどうか」という発展的なご意見を多数頂戴したことを踏まえ、今後一年に一度の同窓会を両研究室合同同窓会として開催していくことが本会において提案され、承認されましたことをご報告申し上げます。当日は急遽出席された方もあり、膳席が不足し諸先輩にお叱りを受けるなど運営上の不手際があったものの、遠方から多数ご参加いただいたこと、先生方や諸先輩方が率先してホスト役を買って出たことにより新旧上下なく宴席に一体感が生まれ大盛況裏に終宴することができました。時間のため忘れた、互いに健康を称え合い次回の同窓会での再会を約しつつ、長い京都の夜は静かに更けていくのであります。

今回の合同同窓会には更に多くの会員がご参加くださいますようお願い申し上げます。追記 通信費として千円を六十六名、一名の方から五千円のカンパを頂戴しました。改めてご協力いただきましたことにつきまして感謝申し上げます次第です。



第三回九州・沖縄支部総会報告

六月十四日(土)、二〇〇三年度立命電友会九州・沖縄支部第三回総会及び見学会が、湯の町別府を一望する大分県別府市A.P.U.立命館アジア太平洋大学にて開催された。当日は朝から小雨、数分ぶりの大分行き、長崎を早朝に出発した。目的のA.P.U.は大分自動車道別府湾SA近くの高台に位置している。SAの山手側には十文字テレビ送信所があり、眼下にA.P.U.はある。以前、基幹テレビ送信所湿気対策調査で訪れた時は開校に向かつて整地工事が開始されたばかりであった丘も今では立派な施設に変身していた。当日二名の

欠席があり、参加者十四名。定刻



の十一時三十分、支部長挨拶の後、支部会計報告、立命電友会創立十周年記念祝賀会報告、次期支部体制が討議され、次期場所として会員数の一番多い福岡県、開催日は従来通り六月第二土曜日となった。午後からは前田秀敏A.P.U.次長によるA.P.U.概要説明。その後、メディアアラボ、ホール学生寮等を見学。とりわけ、特高受電室、中央監視室等電気設備では感歎の声が出ていた。最新の学内設備、中でも温泉完備の学生寮の見学では外国人寮生達から礼儀正しい挨拶があり、前田次長の今年度卒業生の就職内定率が高いという言葉からも、彼らの目的を持った勉学姿勢を身近に観て納得、A.P.U.が新鮮に感じられた。将来はアジアに近い立地条件を生かし、情報・環境系を追加。各地域の産業と人材の育成へと大きく寄与発展されることを九州在住者として願っている。衣笠の木造校舎と比べ今昔の感を抱きつつ、A.P.U.を後にし、中津市在住の級友柳本氏と再会し帰途に着いた。

昭和三十八年卒 丸林 富久

事務局便り

会報二十二号の発行にあたりご寄稿いただいた皆様方には、心より御礼申し上げます。

住所変更の事ですが、沢山の方から届けを頂き大変嬉しく思っています。今回、ページの都合により全員、載せることが出来ませんでした。平成二年卒の方からは次回二十三号に必ず掲載いたしますので、ご了承いただきましたと思います。申し訳ありませんでした。

計報

卒年	氏名	卒業日
昭和11年	加藤 金勝	平成14年10月
昭和11年	村田 藤雄	平成10年4月19日
昭和16年	松本 秀雄	平成14年12月9日
昭和20年	森 茂	平成14年7月
昭和23年	梅本 昭二	平成15年2月27日
昭和25年	野坂 秀男	平成13年9月3日
昭和28年	山口 浩	
昭和32年	白木 浩一	
昭和33年	室伏 孝三	平成13年12月27日
昭和34年	川口 孝志	平成15年2月
昭和35年	中川 孝三	平成11年1月
昭和38年	今川 上治	平成11年6月6日
昭和40年	米谷 庄市	平成10年2月1日
昭和45年	大目方敏之	
昭和46年	宇谷 賢一	

立命電友会連絡先
〒五二五-八五七七

滋賀県草津市野路東一―一
立命館大学理工学部電気電子・光系内
立命電友会事務局 高山 茂

宮林(月・木)

電話 〇七七(五六)二六六二
FAX 〇七七(五六)二六六三
E-mail: denyukai@n1.ritsumei.ac.jp
http://www.ritsumei.ac.jp/se/re/denyukai/
(会報の題字は久保之俊氏)